

## 「教室で自殺した少女事件で教委が謝罪」報道に接して

7通の遺書を残して教室で自殺した昨年9月の小六の少女の事件で、1年後の今になってようやく教育委員会が謝罪したとの報道（2Pに貼付：参照）を目にした方も多いと思う。

TV報道では、事件当時の教委は、取材に対し「遺書でなく手紙であり、身体的ないじめの証がないので……」と宣っていたよう。

担任教師も、教室で何度か少女のことでみんな話し合ったことがあったのに、親にそのことは耳に入れていなかったとか。

この報道に接し、以前にメル友から、「知人の悩み事で…」と、私に情報提供を求めてきたことを思い出した。

メル友の知人は、離婚問題で相手側に引き取られた幼少の孫がどうも虐待されているのではないかと心配になり、児童相談所や町に相談したが、「目に見えて身体的なものがないと……」と分かってもらえず、夜も心配で寝られないと電話口で泣いていたとか。

そこで、メル友は、「これが本当なら大変な事になるかも…」と思い、「児童相談所以外では何所へ、どのように相談したら良いのでしょうか？」とのメールであった。

ネットで調べ、民間で相談に乗ってくれそうな虐待問題に取り組むサイトの情報をメル友へ提供した。

それにしても、いじめ、虐待は何も身体的なものだけでなく精神的なものもあることは分かっているはずだろうし、また、過去の事件からの教訓が、学校、行政の現場では十分に活かし切れていないと感じた。

例えば、虐待防止については、当HPで以前に「『ネグレクト』の検証報告書である書籍を読んで（「雑学BN」の書籍等読後感関係（I）P、2005.02.03.：参照）」の中で触れているように、「関係機関・者の、まずは情報を共有し、地位や立場とは関係なく、個人的で感覚的な不安や感想も話題にできるような、ざっくばらんな場であるネットワークがとても重要だ。」と提言されている。

教育現場、行政現場として「身体的なものがないと……」のような消極的な対応でなく、後々、危惧が取り越し苦労であればそれに越したことはないのだし、当人や危惧を抱いている人の「個人的で感覚的な不安」の相談に、まずは関係者がネットワークを組むという、積極的な対応の仕方があるように思うのだが…。

「いじめ、差別は、する側は鈍感、される側は敏感。」を、関係機関・者は今一度再認識して対応に当たって欲しいと思う。

（2006年10月3日記）

## 自殺小6、いじめ記した遺書 「みんなに冷たくされた」

2006年10月02日20時34分

北海道滝川市の市立小学校で昨年9月、自分の教室で首をつり、意識不明のまま今年1月に死亡した6年生の女子児童(当時12)が、「みんなに冷たくされているような気がした」「キモイと言われた」などと書いた遺書を残していたことが分かった。同市教委は2日、記者会見して「児童の心のサインをつかめなかったことはおわび申し上げるが、現時点ではいじめの事実を確認できていない」と話した。

女兒は昨年9月9日、教壇そばの天井にある「スクリーン台」に自転車の荷台のひもをかけ、首をつった。教卓に「死んだら読んでください」と書いた紙を上、7通の遺書を残していた。

学校への手紙には「3年生のころからです。私の周りにだけ人がいないんです。5年生になって人から『キモイ』と言われてとてもつらくなりました」。6年生全員にあてた手紙には「私がいなくなってほっとしたでしょう」「みんなは私のことがきらいでしたか？」などと書かれていた。

これまでの市教委の調査で、自殺の10日前にあった修学旅行の部屋割りを決める際、女兒がどのグループに入るかをめぐり3度にわたって話し合いがもたれたことや、昨年7月上旬の席替えで、男子児童が「女兒の隣になった子がかわいそう」と発言し、女兒が担任に訴えていたことなどが分かった。いずれも担任が指導して、学校は「解決し、仲直りした」との認識をもっていたという。

だが、自殺直前には同級生の一人に、「首つり自殺する 学校？ 自転車ゴムひも たぶん9月中」などと、ほのめかす手紙を渡していたという。

この日、遺書の内容が一部で報道されたことを受けて会見した安西輝恭・市教育長は、「ささいな言葉や行為であっても無視することはできないが、一方でその受け取り方は人によってさまざま。いじめを裏付ける決定的な事実が出てきていない」と述べた。今後、市教委として改めて経緯などについて調査するという。

女兒の母(37)は「いじめに気づいてやれば、転校するなどの選択肢もあった。せめてトラブルに気づいた先生から、連絡の一本さえあれば」と話している。